

2024 年度 第 4 回
2 年 駿台学力テスト

解 答 解 説 集

英語・数学・国語

1 月 1 9 日（日）実施



駿台中学生テストセンター主催



2024S24031

節には自立語が一つしかないからです。文節に分けると「思ったよりも／暑く／なかったので／郊外に／住む／友人の／家に／出かけた」となるので八文節になり、自立語は八つあることがわかります。自立語は「思っ」(動詞)・「暑く」(形容詞)・「なかつ」(形容詞)・「郊外」(名詞)・「住む」(動詞)・「友人」(名詞)・「家」(名詞)・「出かけ」(動詞)です。なお「なかつ」は助動詞「ない」ではなく、形容詞「ない」です。直前の形容詞「暑い」を打ち消す意味で使われており、補助形容詞ともいわれています。

なかった。しばらく手をつかんだまま争いあっていたが、明かり障子を引きはずして、広庇へ出た。障子を中に隔てて、上に乗ってしまった。軒の高さと同じくらいに見えたけれど、障子の下になってみると、ずいぶん小さい。手もまた細くなったので、いよいよ勢いに乗って押さえつけていると、細い声を出して、キイキイと泣いていた。その時、下人を呼んで、火を打ち出してともしてみると、古狸だった。「あした村人に見せよう」と言つて、下人に預けておいたのを、下人たちは、どうしようもないことに焼いて食べてしまった。次の日、起きて尋ねてみると、頭だけが残っていた。本体の方ではなくて、その頭だけを村人に見せたのだった。そののちは、長くこのお堂で人を襲つて取り殺すことはなかった。

五 文法

問一 連体詞は自立語で活用がなく名詞(体言)だけを修飾します。

「小さな」は、形容詞「小さい」が活用したものではありません。なぜなら、「小さい」が「こと」(名詞)に接続する連体形は「小さい」だからです。同様に、「大きな」・「おかしい」も連体詞です。

問二 (1)言い切りの形は「のぞく」です。未然形に接続させたとき、活用語尾がア段になれば五段活用、イ段になれば上一段活用、エ段になれば下一段活用です。「のぞく」は未然形は「のぞか(ない)」なので活用語尾がア段になり、五段活用の動詞だということ

とがわかります。「た」・「て」に続く形は連用形です。古語では「のぞき(て)」のように使われていましたが、次第に音が変化し(この変化を音便といいます)現在の「のぞい(て)」のようになりました(この変化をイ音便といいます)。(2)「防げる」が言い切りの形になります。「防ぐ」ではありません。「防ぐ」を「ない」に続けると「防が(ない)」になるからです。「防げる」は「防ぐことができる」という意味をもった動詞で、「防ぐ」が変化した可能動詞です。「防げ(ない)」は活用語尾がエ段ですから下一段活用だということがわかります。そして「ない」に続くのですから未然形です。

問三 「よく」は副詞です。自立語で活用がありません。主に用言や他の副詞、ときには体言を修飾します。「よく」は、(いつも)・(しばしば)という意味で、用言「いわれる」を修飾しています。「一文節で抜き出」すという指示ですから、「いわれるが」を抜き出します。

問四 「ただちに」は副詞です。用言「ある」を修飾しています。したがって、この「に」は副詞の一部ということになります。ア形容動詞「静かだ」の連用形の活用語尾です。イ接続助詞「の」の一部です。ウ助動詞「ように」の一部です。エ副詞「さらに」の一部です。よってこれが文法的な説明として同じものになります。オ格助詞「に」です。

問五 実は文節の数を数えればそれが答えです。なぜなら、一文

つかんでしまった」のです。よって「取りてけり」の主語は「助康」だということがわかります。

問五 「いふかひなし」は「いつてもしかたがない、どうしようもない」という意味です。助康は捕まえた古狸を次の日に村人に見せようと下人に預けたのですが、下人は勝手に焼いて食べてしまったのです。よって正解はエです。

問六 ア 最初の一文に説明されています。「助康は丹波の国に出かけて狩りをしていたら日が暮れてしまい、古いお堂があったので中に入って夜を明かそうとした」のでした。イ 第二段落の最初で説明されています。「雪が降り風が吹いてきて聞いていた通りに辺りの雰囲気は気味悪い感じになってきた」のでした。ウ お堂を訪れる人を襲っていたのは古狸でしたが、法師が古狸を使っていたわけではありません。お堂の軒の高さと同じくらいに見えた法師は、実は古狸だったのです。ですからこれは本文の内容に当てはまりません。エ「軒と等しう」で始まる一文で説明されています。「軒の高さと同じくらいに見えたけれど、捕まえてみると小さかった」のです。オ 人を襲ったものの正体はたしかに古狸でした。しかしこの本文では、村人たちが古狸を捕まえた助康に感謝したかどうかは書かれていません。したがってこれは本文の内容に当てはまりません。

【現代語訳】

斎藤左衛門の尉助康が、丹波の国に出かけて、狩りをしていて日が暮れてしまったので、古いお堂があったので中に入って、夜を明かそうとしたところ、その辺りの詳しい事情を知っている者が、「このお堂には人を襲って取り殺すものがあるので、用心もなく気安くお宿りになるのはどんなものか」と言ったのを、「何事もないだろう」と言って、そのまま滞在した。

雪が降り風が吹いてきて、聞いていた通り、辺りの雰囲気はなんともしえないような気味の悪い感じになって、正面の間で柱によりかかっていると、庭の方から、(得体の知れない)ものが激しい勢いでやってきているようなので、明かり障子の破れ目からすばやく見ると、庭には雪が降って白くなっていたところに、お堂の軒の高さと同じくらい(に背の高い大男)の法師が、黒々として(立っているのが)見えた。しかしながらはつきりとは見えない。そうこうしているうちに、明かり障子の破れ目から、毛むくじやらの細腕を差し込み、助康の顔をなでまわした。そのとき、(助康が)すばやくすわり直したので、(相手は細腕を)引つ込めた。その後、明かり障子の方に向かって、からだをまるめて寝て待っているうちに、また先ほどと同じように手を入れてなでてきた手をむんずとつかんでしまった。つかまれて引き戻そうとするけれども、(助康は)もとかから力のすぐれている者なので、強くつかんだまま放さ

四 古文の読解

《出典》『古今著聞集』卷第十七「斎藤助康、丹後国へ下向し古狸をいけど生捕る事」

『古今著聞集』は鎌倉時代の説話集です。

*問題作成の都合上、表記や表現を一部改変したところがあります。

問一 「の」前後の関係を考えて現代語訳を考えてみましょう。

A「古いお堂があった」となります。 B「人を襲って取り殺すものがある」となります。 C「(得体の知れない)ものが激しい勢いでやってくる」となります。 D「明かり障子の破れ目」となります。 E「お堂の軒の高さと同じくらい(に背の高い大男)の法師が、黒々として(立っているのが)見えた」となります。 A・B・C・Eの「の」は前後の関係が主語述語の関係になっています。Dの「の」は連体修飾とそれを受ける語の関係になっています。よってDが他と異なることがわかります。

問二 狩りに出かけた助康は日が暮れてしまったので古いお堂で夜を明かそうとしたのです。ところが「その辺の子細知りたる者」すなわち「その辺りの詳しい事情を知っている者」が助康にそれはやめたほうがいいと忠告したのです。その忠告の内容がせりふに当たります。「この堂には……いかが」がそのせりふですから、はじめの三字「この堂」が答えとなります。

問三 「何事のあらんぞ」は(何事があるだろうか、いやあるまい)すなわち「何事もないだろう」という意味です。これは何事があ

っても大丈夫だという自信のあらわれともいえます。前問で指摘した「このお堂には人を襲って取り殺すものがあるので、用心もなく気安くお宿りになるのはどんなものか」という忠告を受けた助康ですが、その忠告を受け入れませんでした。だから「なほどどまりぬ」、すなわち「そのまま滞在した」のです。何か事があっても大丈夫だという自信があったからです。「たいしたことではないという大胆な気持ち」はその自信を説明しているといえるでしょう。よってエが正解になります。ア まだ何も起きていません。イ「不安に思う」ではこの後の助康の行動と矛盾してしまいます。ウ(あとに引けなくなった)わけではないし、「困っている」わけでもありません。オ「あきらめ」が不適切です。

問四 出来事を少し前から順に追ってみましょう。二つ前の文に

「ほそかひなをさし入れて、助康が顔をなでくだしけり」とあります。(何者かが細腕で助康の顔をなでた)ということです。「なでくだしけり」の主語は「もの」です。次に「きと居直れば、ひき入れけり」とあります。これは「助康」が(すわり直し)、「もの」が(細腕を引つ込めた)のです。助康は(からだをまるめて寝る)のです。が、再び「もの」が(手を入れて(助康を)なでてくる)のです。そこで今度は「助康」は「手をむずと取りてけり」、つまり(むんずと

イ人とドイツ人が共通語として英語で話した」ように（韓国人とアメリカ人が共通語として中国語で話した）のです。世界では英語が主流になっているのが現実です。どの言語にも「真実」が存在するのにまるで（英語だけが真実を示しているかのようだ）というのです。しかし（中国語の宇宙の中で外国人同士が中国語で話す）ように、（日本語の宇宙の中で外国人同士が日本語で話す）ようになってほしかった、というのが筆者の主張です。以上をふまえて、「外国人同士が日本語を用いて話すようになること。」とまとめればよいでしょう。

問七 三つ前の段落で（アメリカや中国と違って「広大な」日本列島とは言わない）のに、（津軽への旅は「大陸的」な距離感を覚えさせる）というのです。この「『大陸的』な距離感」というのはアメリカ大陸や中国大陸での距離感をさしています。つまり「広大」だということです。それは（地元の人同士が話す言葉の分かなさ）からきているものだということです。（方言は分らないが他者の言語感覚を伝え多様性も美しい）と筆者は指摘します。方言が存在する日本は、面積では広大ではないかもしれないが、方言の音を通して「広さ」が浮かび上がってくるというのです。以上をふまえて、「日本列島の面積は広くないが、方言の音を通してその広さが浮かび上がること。」とまとめればよいでしょう。

問八 ア（言語によって見える世界の違い）については筆者が説明

しています。しかし「さまざまな言語で表現することが作家に求められている」とは主張していません。イ 筆者は原稿用紙を手書きで埋めて書くという姿勢をとっています。しかし（手書きによって日本語の美しさや表現の豊かさを再認識できる）という主張はしていません。ウ（万葉集の一首から当時の日本人の感情が伝わってきた）とは説明していますが、（古代の日本語の理解が日本の歴史の理解につながる）とは主張していません。エ 筆者が、作家になる前に『万葉集』を英訳したときの体験を読み取りましょう。「あをによし」で始まる和歌は筆者に鮮烈な印象を与えます。なぜなら、当時の日本人の感情が同時代のような新鮮さで伝わったからです。（自分の都市や自分の文化の美しさを主張しているにもかかわらず、ナショナリズムにつきものの暗さも誰かを排他する雰囲気もない）というのです。そんなおらかな文化意識を語った声が（現代だけでなく異文化にまで伝わる）というのです。よってこの選択肢が適切。オ（筆者は津軽で方言が分からなかった）のはたしかですが、（苦勞した）とは書かれていません。また（方言という不透明な言葉のもやが文化の歴史的な密度を想像させてくれる）と説明していますが（だから方言を守ることは重要だ）とは主張していません。

ろの内容を説明しているのです。よってウ「そして」が当てはまります。

問二 「枕詞」(まくらことば)とは和歌の修辭法の一つです。特定の語句を導き出すためにその前置きとなる修飾語です。たいてい仮名の五音からなります。普通は訳しません。「しろたへの」(衣・袖などを導く)、「ひさかたの」(空・光などを導く)などがあります。

問三 筆者が日本語に対してどのように向かっているのかを読み取ってみましょう。それはこの前の三つの段落で説明されています。(日本の家で日本語を用いて原稿用紙に書きで書く)・(縦文字(原稿用紙に日本語で縦書きで書いている状況)を通して世界の「今」を表すのが面白い)・(外国での経験も日本語を用いて表現する)という内容をふまえると、「世界を、『和訳』するように日本語で書く」という筆者の姿勢は「日本的な空間に自らをおき世界の今を日本語を用いて表現すること」だといえます。よってオが正解です。ア「旅で経験したさまざまなできごと」と「旅」に限定しているので不適切です。イ「外国語で書かれた世界を日本語に翻訳」という説明はありません。ウ「日本の伝統的な考え方」と限定しているのが不適切です。エ「外国の複雑なできごとをわかりやすく説明する」というのが不適切です。

問四 (英語では単数と複数をきちんと区別して表現する)けれど

も(日本語では単数複数の区別がない)。自分の作品の翻訳や安部公房のエピソードを用いて、この違いについて説明しています。単数と複数を区別しない日本語は英語に比べれば見える世界に「限界」があるかもしれません。しかしそれは逆に英語とは異なる世界が見えてくるはずだということです。以上をふまえればエが正解です。ア(英語にはない可能性がある)ことに触れられていません。イ「英語が描く世界を越える」かどうかは触れられていません。ウ「すぐれた表現方法」かどうかという説明はありません。オ(表現できないことがある)というような説明はありません。

問五 筆者が住んでいる新宿から奈良への旅の経験について説明しています。「もう一つの表現の言葉」ここでは「古代の日本語」を指しています。それを用いて表現された『万葉集』を思い出しながら奈良の京を歩いたということです。以上をふまえれば、イが正解です。ア(昔の日本語を思い出す)としか説明されていないので不適切です。ウ(古代の日本語を理解する方法)は説明されていません。エ「海外旅行」との比較は説明されていません。オ 古代日本語を中国と奈良の旅の比較に結びつけている点がないので不適切です。

問六 筆者の北京での体験を読み取りましょう。それは(韓国人と(アメリカ人である)筆者とが中国語で会話をしたこと)です。(タ

えて、「燈火採集法でたくさんの美しい蛾に出会えたこと。」とまとめればよいでしょう。なお、この夢では蛾をつかまえてはいません。ですから「蛾をつかまえた」といいきつては適切ではありません。また「蝶よりも蛾の方が美しい」と少年は考えていましたし、たくさんの美しい蛾が飛んでいる様子を夢みていることから「美しい」という修飾語は解答に必要です。「蝶」と限定した答えや「きらびやかな昆虫」のように蛾と断定していない答えも不適切です。

問六 問五で説明したように「ひとつの願望」は満たされました。すると少年は「もうひとつの願望」を思い出したのです。それは「梅干を食べること」でした。そこで母親に「勢いこんで」何時になつたら食べられるのかと聞くのです。「勢いこんで」という表現から少年がいかに熱望しているかがわかります。その勢いに圧倒されたのでしょうか、母親は「十日」と答えるのですが、確信のある答えではないのです。だから「失敗^{しま}ったと思った」のです。少年は答えを予想していたにもかかわらず、母親を動揺させる質問をしてしまったことを悟ったのです。だから後悔したのです。以上をふまえて、「母親を動揺させる質問をしてしまったから。」とすればよいでしょう。

問七 斎藤茂吉は、医者で病院に勤務するかたわら歌誌『アララギ』の編集に携わりました。正解はアです。イ 石川啄木^{たくぼく}のことです。

貧困と病気に苦しむ二六歳でなくなりました。ウ 与謝野晶子^{よさきのあきこ}のことです。エ 若山牧水^{ぼくすい}のことです。オ 正岡子規^{しき}のことです。

Ⅲ 論説文の読解

《出典》リービ英雄『バイリンガル・エキサイトメント』(岩波書店 二〇一九年)

筆者は作家・大学教授。一九五〇年生まれ。アメリカで生まれ少年時代を台湾・香港^{ホンコン}で過ごし、アメリカの大学で日本文学を教えその後日本に定住しています。主な著書に『星条旗の聞こえない部屋』・『日本語を書く部屋』・『英語でよむ万葉集』などがあります。*問題作成の都合上、文章を一部改変したところがあります。

問一 前後の文脈を丁寧を追ってみましょう。Aの前では「原

稿用紙に手書きで書き込む」という筆者の書き方を述べています。〈手書きで書く〉ことが通常は「伝統的な書き方とみなされる」のです。後ろでは〈その書き方に「伝統」を求めているわけではない〉と否定しています。つまり前後の関係が逆接になっているといえるでしょう。よってエ「しかし」が当てはまります。Cの前では「文化意識を語った声が、二十一世紀に聞こえてくる」と説明しています。後ろでは「異文化にまで、そのことばが伝わる」と説明しています。前の内容にさらにつけ加えて(続けて)後

が嫌になる」とは読み取ることができません。イ「申し訳ない」と思っているのも想像できますが、これだけでは解答が不十分です。〈少年に悟られたくない〉という説明が必要です。ウ「うつとらしい」と思っているとはいえませんが。エ 夫のことはここではわかりません。

問二 ―― 線②直前に「幼い頃からひよわな」とあること、〈病気になる〉と梅干が鮮やかに目に映る〉・〈今度の病気は重そうだ〉・「病気といえば梅干を食べる」などの表現から、少年は病気がちだということがわかります。また、〈氷嚢の感触や薬の色を好む〉・〈けだるさや痛む身体や臭いも愛する〉という表現からは、病気に對して悲觀的な思いはもっていないことがわかります。むしろ病気に慣れているといえるでしょう。それが「親しみを抱く」という表現につながるのです。ここから、〈病気になっても落ち込んだりがっかりしたりすることはない〉という気持ちを読み取ることができます。以上をふまえて、1. ふだんから病気がちである、2. 病気になっても落ち込まない、の二点を中心にまとめるとういでしょう。

問三 ―― 線③直前に「病気が、少年の心をふかく沈ませ」とあります。一箇月たっても食事は塩気がなく退屈な日々が過ぎるばかり・梅干の味にこがれるだけで諦めるしかないので、少年の心は沈んでいくのです。そんな少年は〈今度はきらびやかな色

彩にあがれる〉のです。そのきらびやかな色彩の対象になったものはかつて学校の宿題として集めた昆虫たちの標本だったのです。以上をふまえて正解はウということになります。ア「病気が治ってほしい」と少年は願っているでしょうが、この場面とはまったく関係ありません。イ「新鮮な刺激を望んでいる」という表現が不適切です。〈美しく思いたす〉ことは「刺激」とは関係ないでしょう。エ ここでは〈なにをしようかあれこれ考えている〉とはいえませんが。オ「心の中では反発を感じる」が不適切です。

問四 A「陳腐」とは、ありふれていておもしろみが感じられない様子のことです。よってイが正解です。B「底が知れない」とは、どれくらいあるかわからないほど程度がはなはだしい様子のこととです。よってエが正解です。

問五 ―― 線④が含まれる段落の最初に「……少年は我に帰った」とあります。この前の段落「……あたり一面……わずかにそう考えた。――」を受けたものであり、この段落は少年がみていた夢の内容を表したものです。〈少年が森の中で白布、アセチレン燈を使って蛾をつかまえようとしている〉内容です。これは父が買ってくれた昆虫図譜の末尾にあった燈火採集法という昆虫採集法なのです。少年は夢の中で燈火採集法で美しい蛾をたくさんつかまえようとしたのです。たくさんの美しい蛾に囲まれて少年は〈ひとつの願望を満たすことができた〉のです。以上をふま

〈出題〉

	大問名	設問	配点
01	漢字の読み書き	一	16点
02	小説文の読解	二	27点
03	論説文の読解	三	27点
04	古文の読解	四	18点
05	文法	五	12点

解説

一 漢字の読み書き

読めるだけでなく、書けるようにしておきましょう。また、知らない語は意味も調べておきましょう。辞書を引く習慣をふだんから身につけて、語彙を広げていくことはとても大切です。(1)「侵入」と書き、〈入ってはいけないうちに無理に入ること〉という意味です。(2)「忌避」と書き、〈いやがって避けること〉という意味です。(3)「即興」と書き、〈その場で思いのままに詩や歌などの作品をつくること〉です。(4)「稚拙」と書き、〈未熟でへたなこと〉という意味です。(5)「みぞう」と読み、〈今までに一度もなかったこと〉という意味です。「みぞゆう」ではないので、注意しましょう。(6)「へいこう」と読み、〈つりあい〉のことです。「へいしよう」ではないので注意しましょう。(7)「ひより」と読み、〈天気〉のことです。(8)「かんじやく」と読み、〈物音が聞こえずさびしいほど静かな様子〉のことです。

二 小説文の読解

《出典》北杜夫「百蟻譜」

筆者は作家。一九二七年生まれ、二〇一一年没。「夜と霧の隅で」、『^{にれ}榆家の人びと』などの小説をはじめ多くのエッセイも残しました。問にもあるように北氏の父は歌人で医者、斎藤茂吉です。

*問題作成の都合上、文章を一部改変したところがあります。

問一 少年が病気であることはわかりますが、病名は次の段落で

「急性の腎炎」だと示されます。医者から、食事は「刺戟物や蛋白質」を控えるように指導されています。普段の病気なら食べられた梅干が、「刺戟物」(塩分があり高血圧に適さない)であつたために今回は食べることができなかったのです。それを知らない少年は、〈梅干は何時になったら食べられるのか〉と母親に問います。しかし病状を知っている母親には、それが無理だということがわかつていたのです。実際、このあと一箇月たつても塩気のない食事しか出すことはできませんでした。病気が長引くことがわかつていたので、母親はうそを言うのです。しかも少年にうそをついていることがばれないように、「少年の顔を見ないように」答えるのです。直前の「さりげなく」という表現からも、その気持ちわかります。よって正解はオです。ア「少年に梅干を食べさせることができない」のはたしかですが、〈だから自分

国

語

解答

二													
問七	問六			問五			問四	問三	問二			問一	
ア		を	(例)母	こ	の	(例)燈	A	ウ	な	っ	(例)あ	ふ	オ
		し	親	と	美	火	イ		い	て	る	だ	
		て	を	。	し	採	B		気	も	た	ん	
		し	動		い	集	エ		持	落	め	か	
		ま	揺		蛾	法			ち	ち	に	ら	
		っ	さ		に	で			。	込	、	病	
		た	せ		出	た				お	病	気	
	か	る		会	く		こ	気	が				
	ら	質		え	さ			と	に	ち			
		。	問		た	ん			が	な	で		

一		
(7)	(4)	(1)
ひより	稚拙	侵入
(8)	(5)	(2)
かんじゃく	みぞう	忌避
	(6)	(3)
	へいこう	即興

[五]					
問四	問三	問二		問一	
エ		(2)	(1)	連体詞	
問五		ウ	ア		活用の種類
ハ		未然形	連用形		活用形
いわれるが		※問二(1)・(2)はそれぞれ完答			

四	
問四	問一
ア	D
問五	問二
エ	この
問六	堂
ウ	問三
	エ
	オ

※問六は完答。順不同可。

三									
問八	問七				問六		問四	問二	問一
エ	上	し	な	(例)日	こ	(例)用	外	枕詞	A
	が	て	い	本	と	い	国		エ
	る	そ	が	列	。	て	人		C
	と	の	、	島		話	同		ウ
	い	広	方	の		す	士		
	う	さ	言	面		よ	が		
	こ	が	の	積		う	日		
	と	浮	音	は		に	本		
	。	か	を	広		な	語		
		び	通	く		る	を		

五		四		三		二		一		合計		配点
問八		問七		問三・二		問二		問一		合計		
各2点×6		各3点×6		各2点×3		各2点×2		各2点×8		合計		
12点		18点		6点		4点		16点		100点		